

現代に誕生した

芦屋鑄物師

16年間の修業を終え 樋口陽介さんが独立

芦屋釜の里で鑄物師としての技術を習得するために修業をしていた樋口陽介さんが、本年4月に独立しました。樋口さんは、平成17年度に芦屋釜復興工房の鑄物師養成員として採用され、芦屋釜、釣鐘などの復元製作に取り組みました。また、美術作品の製作にも積極的に取り組み、数々の公募展で入選・入賞を重ねています。樋口さんに、芦屋釜復興工房で修業した16年間の思い出や、これからの展望などを聞いてみました。

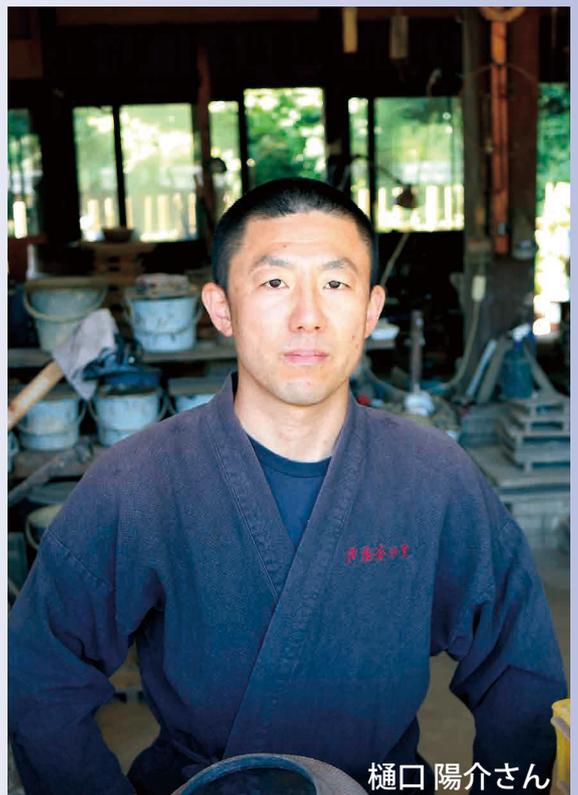
美術教員を目指していた 大学生の道を変えた出会い

もともと美術の教員になりたいと思い、大学へ進学しました。大学では、鑄金作家の遠藤喜代志先生が講師として教えにこられていました。遠藤先生は、江戸時代初期頃に製作が途絶えた「芦屋釜」の復興を目指す芦屋釜の里の工房指導者として活動されていました。遠藤先生から声を掛けていただき、芦屋釜の里工房でアルバイトをするようになったのが初めての関わりです。

その後、大学院では弥生時代の鑄造技術の研究などを行う中で、モノづくりの楽しさや古代の技術解明のおもしろさに夢中になっていく自分がいました。

漠然とですが、美術教員以外にも研究やモノづくりへ進む道もあるな、と思うようになりました。

芦屋釜の里の指導者であった遠藤先生の退任と私の大学院の修了が偶然重なり、採用試験を受ける機会を得ました。幸いにも採用していたことになり、平成17年度から鑄物師養成員として修業を始めることになりました。



樋口陽介さん

最高難度の技術が要求される芦屋釜の復元に挑む
1300度以上の溶鉄を鑄型に流し込む。一瞬の作業だ

修業を始めて

芦屋釜の里の鋳物師養成員となった平成17年。じっくりと技術を学べる機会が来るかと思いましたが、考えが甘かったです。

芦屋釜の里では長いスパンの製作と養成計画が練られており、私が入ってから釜造りと並行して鐘造りも行わなければなりませんでした。

最初の4年間で鐘を3点製作しました。鐘の重さは約30kg、約100kg、約200kgと、徐々に大きくしていきながら、往年の芦屋鋳物師の技術復元を図りました。その間、何とか時間配分をしながら芦屋釜の技術習得に励みました。

※当時製作した鐘は、現在芦屋釜の里資料室に展示されており、鐘の音を聞くことができます。



修業中はさまざまなところに芦屋釜の調査に行きました。主に東京、京都が中心で、多くの美術館や博物館の学芸員の皆さんと親しくなり、非常に多くのことを学ぶことができました。

古い芦屋釜を見る度に、新しい発見があります。芦屋釜の復元に真剣に取り組むようになり、修業を始めた頃には気付かなかった先人のこだわりや苦労したところが、作品の隅々から感じられるようになりました。

岩手県盛岡市にある南部鉄器の工房にも、半年間修業に行かせてもらいました。実際の鋳物産地の様子を知り、さまざまな技術を学ぶことができました。

南部のように有名な産地でも、鋳物の量産化の技術が進んだ一方で、古くから続く熟練の必要な技術が徐々に失われているそうです。その結果、付加価値の高い鋳物製品を生み出しにくくなっていることを知りました。産地の現状を見聞きし、芦屋町の考え方、すなわち古い技術を追求するという姿勢が間違っていないことも確認する

ことができました。

古代の技術研究と美術作品

ことができました。

あまり知られていませんが、芦屋釜の里は、国内外の研究機関と協力して、古代の鋳造技術解明のための実験や研究も行っています。近年は、鋳物の起源ともいふべき、



平成30年 中華人民共和国・程永華駐日大使来園



だいりゅうがま
大雲龍釜



むじしんがま
無地真形釜



はまつずしんがま
浜松図真形釜

樋口陽介さんの作品

中国古代青銅器の技術解明を進めています。いろいろとおもしろい発見も続いています。

壮大なテーマですが、「なぜ古代の中国で非常に高度な技術が生み出されたのか」を考えるようになりました。それは、「なぜ中世の芦屋で美しい芦屋釜が生み出されたのか」をさらに深く考えるきっかけになっています。

私は鋳物の美術作品を造り、公募展などに出品することもあります。佐野ルネッサンス鋳金展では大賞をいただくなど、過分なる評価をいただくこともありました。

また、古代の鋳造作品の研究に携わること、作品づくりの発想を得ることもあります。研究や調査を行いながら、作品を製作できる環境のおかげだと感謝しています。

地域に根付く

芦屋釜は江戸時代初期頃に途絶えており、芦屋町はその復興を平成7年から始めました。鋳物を産業として、再びこの地に根付かせる必要があります。

そのことを強く意識するようになったのは、鋳物師養成員の先輩である八木孝弘やつきたかひろさんが、平成25年度に独立してからです。全国の茶道界への周知などを模索する中で、産業として続くには一定の売り上げを出さなければならぬし、後継者に技術を伝えなければなりません。それが継続することで、自ずと地元の産業として認知され、「根付く」ことになるのだろうと思います。

根付くために今の自分が果たす役割は何か、常に考え、意識しながら歩みを進めていかなければなりません。

これから

私が製作した現代の芦屋釜が世に出るようになるので、先人の名に恥じぬよう、また注文主の期待されたもの以上の出来となるよう、これまで以上に精進せねばなりません。

一方で、美術作品に関しては、あまり決めごとをせず、感じたことを形にしてみたいと考えています。



令和3年 小学校で行われた古印づくりのワークショップ

鋳物は、普段はあまり馴染みがないものかもしれませんが、地元の子どもたちには、鋳物のワークショップなどをおして、モノをつくる楽しさを知ってほしいと思っています。「知らないことを知る楽しさで心が豊かになる」、「地域の風土を愛する心が育まれる」、そのような心の醸成のきっかけが、芦屋の鋳物であったならばすばらしいことだと思います。



あられじしんなりがま
霰地真形釜



つるかめずしんなりがま
鶴亀図真形釜



あられじつつがま
霰地筒釜